

ラオス深南部山地のロングハウスに関する統合的研究

—「高密度居住」を可能にする木造長大家屋の特質と居住文化—

主査 清水 郁郎*1

委員 蟹澤 宏剛*2, 木本 健二*3, 畑 聡一*4, 増田 千次郎*5, パタナー・ポンティップ*6, トンワン・テップカイソン*7

本研究は、ラオス人民民主共和国においてベトナムと国境を接する南部山地に居住するモン・クメール語系集団のうち、パコ社会におけるロングハウスを調査し、その建築物としての特性と、「高密度居住」や「共住」を可能にする社会・文化的特性を究明すること、それにより、東南アジア大陸部の木造家屋研究に一定の貢献を果たすことを目的とする。

キーワード : 1) ラオス, 2) ロングハウス, 3) パコ, 4) 高密度居住, 5) 共住, 6) 東南アジア

INTEGRATED STUDY ON THE LONGHOUSE IN DEEP SOUTH MOUNTAINOUS AREA OF LAO P.D.R.

— Architectural and Cultural Characteristics of Wooden Long Houses
from the Viewpoint of the Aspect of Residential Density—

Ch. Ikuro SHIMIZU

Mem. Hirotake KANISAWA, Kenji KIMOTO, Soichi HATA, Senjiro MASUDA,
Pathana PHONETHIP and Thongvah THEPKAYSONE

This study aims to understand architectural and cultural characteristics of the wooden long house among the Pako, who are one of ethnic minority group living in the mountains of deep south area of the Lao People's Democratic Republic and classified into the Mon-Khmer language group. They are scattering around the border area between Lao and Vietnam. This final report is based on the field survey conducted among them in that area. The issues at point toward the result will be as follows; 1) architectural characteristic of the longhouse, 2) socio-cultural characteristic on longhouse that allows to be "high-density residential" and "living together with the members of many households" inside the longhouse. By studying that, we would like to aim at a certain contribution to the study of wooden houses in mainland Southeast Asia.

1. はじめに

1.1 研究の背景

ラオス人民民主共和国（以下ラオス）は、東南アジア大陸部の内陸に位置し、周囲を5つの国に囲まれている（図 1-1）。ラオスはまた、国内に50あまりの民族集団を抱える多民族国家でもある。ラオスにおける学術研究については、旧宗主国であるフランスとの植民地末期の戦闘やベトナム戦争への参戦、同戦争終結後の共産主義化などによって、長らく停滞していた。それは建築学研究においても変わらない。しかし、1980年代以降は、共産主義体制を維持したまま市場経済を導入し、近代化を推進しながら、外国に門戸を開放しつつある。これにより、諸分野の基礎研究も徐々になされるようになった。ところが、建築に関する研究については、同国北部に居住するラオ・タイ語系、チベット・ビルマ語系、モン・ミエン語系集団に

偏っており、南部の、とくにモン・クメール語系集団については、人類学や民族学の少数の研究を除けば、いまだに詳細な研究がなされていない。また、東南アジア諸社会で顕著な石造建築は、しばしば国家や王権



図 1-1: 調査地（四角内）

*1 芝浦工業大学 建築工学科

*2 芝浦工業大学 建築工学科

*3 芝浦工業大学 建築工学科

*4 シグマ環境+建築設計室

*5 芝浦工業大学 建築工学科

*6 ラオス国立大学 建築学部

*7 ジャンピング・ツアー

に関連するが、一般の人びとが暮らす木造家屋へのアプローチは、端緒にすぎたばかりである。

1.2 研究の目的

本研究は、ラオスの南部山地に居住するモン・クメール語系集団のうち、パコ（Pako）と自称する集団の村落において、いわゆるロングハウスを建築学と人文科学の方法論を融合しながら微視的に調査、研究する。ロングハウスの建築物としての特性と、「高密度居住」や「他者との共存」を可能にする社会・文化的特性を究明し、それにより東南アジア大陸部諸社会における木造家屋研究に一定の貢献を果たす。

ラオスのロングハウスについては、サラワン県（Khween Salavan）内の平地化・核家族化しつつあるカドゥー（Kado）村落において、50人強が暮らしていたロングハウスについての調査報告がある^{文1)}。いっぽう、ラオス情報文化省文化研究所によれば、近年まで、100人程度の集団が居住する複数のロングハウスにより組織されているカトゥ（Katu）村落が、ベトナムと国境を接するセコーン県（Sekong）ダクチュン郡（Muang Dakchung）とカルム郡（Muang Kalm）のあいだの山地に存在することが報告されている^{注1)}。同地域での調査や研究には、人類学の成果が若干あるが、家屋を含む物質文化については着手されていない。本研究は、こうした状況を踏まえて、同地域に暮らすパコ社会において集中的調査を行った。

1.3 研究方法

実際の調査^{注2)}では、同国サラワン県の山地に居住するパコの村落において、ロングハウスの空間組織、力学的構造、構法といった建築学の基礎的資料を収集したほかに、ロングハウスに居住する社会集団、ロングハウスを舞台とした生産活動、建設組織、部材の調達の方法、樹種とその植生、建設道具などについて聞き取り調査を行った。さらに、ロングハウスにおける儀礼、宗教的側面とからめた象徴世界のありよう、神話的解釈などから意味論的側面を究明した。

本研究は、こうしたスタティックな視点に加えて、ロングハウスを取り巻く動態的側面にも注目した。ラオス全土では、フランス植民地時代、インドシナ戦争、内戦、共産主義化による国家統一といった社会変化に加えて、近年はグローバリゼーションによる社会経済的な変容が急速に進んでおり、当該社会もそうした変容の渦中にある。当該社会が、社会外部との関係でどのように変化してきたのか、あるいは国家や地方行政とのかかわりにより、現在のな点でどのように変化しつつあるのかを把握し、それがロングハウスをめぐる

居住にどのように影響するのをも視野に入れる。

1.4 先行研究の検討

研究対象とするラオス深南部のロングハウス社会については、宗教や言語、生業に関して、ラオス情報文化省文化研究所により編纂された概説書とチャズィーによる著作等に若干の記述がある^{文2)}、^{文3)}、^{文4:156-160)}。

いっぽう、西本は、セコーン県カルム郡におけるカントゥ（カトゥ）村落について述べている^{文5)}。その村落は、近年の国家による政策移住により低地に移ってきたが、そのさいに、3から5家族が暮らすロングハウスが核家族化して細分化した。それにより、従来のいわゆる環状集落の様態が大きく変化したという。政策移住という社会外部からの現在の力学が、ロングハウスとそこでの居住にどのように関与するのかを明らかにした点で、西本の論考は本研究に多くのことを示唆する。

建築学に関する研究としては、すでに述べたように、本研究委員会のメンバーである畑による、セコーン県に隣接するサラワン県のカドゥーにおける調査報告がある^{文1)}。そこでは、よそから現在地に移住してきておおよそ30年を経過したふたつのカドゥー村落において、政治経済、移住の来歴の概要に加えて、家屋の間取りやその使用方法が述べられている。移住を経験したためにロングハウスが細分化しているとはいえ、この調査成果は本研究にも参照すべき情報を多くもたらす。本研究は、これら村落のうちのひとつにおいて、畑らが大きく取り扱わなかった点すなわちロングハウスを成り立たせる社会文化的背景とその変容を取り上げる。

2. 調査地の概要

2.1 村落の位置

本研究では、集約的な現地調査をパコのT村で行った（図2-1）。T村は、家屋戸数45、89世帯、567人（うち女性348人）からなる^{注3)}。同村は、サラワン県サムエイ郡（Muang Samuay）のベトナム国境に近い山間に位置し^{注4)}、サラワン市街からは100km程度の道のりである。パコを自称する人びとは、サムエイ郡に1万3千人程度が暮らす。また、同程度の人数がベトナムにも居住する。

同村の名前の由来は、近隣を流れる川の名前とされる。村落は、なだらかな傾斜地にあり、奥に長い。家屋は、たとえばピレ、トロイなど、特定の姓集団がまとまって建設される傾向を持つ。村落の中心には、集会用の広場（ungum waan）がある^{注5)}。この広場には、勲功祭宴において水牛を繋ぎ供犠する柱が立てら

れている。墓地は、村落が立地する斜面下方 500m ほど離れたところにつくられている。墓 (puan acho ku mui) は、壁、床、入り口を持つ家屋に似た形式をしている。puan は屋根、acho は家屋、ku は人、mui は死を意味し、文字通り「死者の家屋」と呼ばれる^{注6)}。墓地に埋葬される遺体は、ゴザと蒲団で巻かれ、棺には入れられない。死者にこうした「家屋」を与えるのは、死者への弔慰とされる。

2.2 社会経済的概要

村の政治体制は、村長 1 名、副村長 2 名がいるが、村長以上の政治力を持つ共産党員が 1 名おり^{注7)}、村の運営に当たっている。これ以外の行政的組織として、長老会、女性同盟、青年同盟があり、それぞれ 1 名の代表者がいる。また、村落の治安を維持する警察、軍関係の役職者もそれぞれ 1 名ずついる。

同村には、1 年生から 3 年生までの授業を行う小学校が、政府により 2005 年に建設された。4 年生以上の子どもは、サムエイ郡の寮に入り、郡内の小学校に通う。また、中学校と高等学校への進学者は、それぞれ年に 2、3 人いるが、同様に郡で寄宿している。

同村には、魚の養殖のためのため池が近年つくられ、魚が養殖されている。池は村全体で共同管理しており、魚は政府や役所の役人などの来客にふるまわれる。

水道は、2006 年に政府の「貧困削減プロジェクト」により 3 カ所に敷設された。また、電気も同じプロジェクトにより、2008 年に引かれた。

T 村からベトナム国境までは、26 km である。ベトナム側の大きな町までは、オートバイで 1、2 時間の行程である。乾季には、T 村からも多くの人々がベトナムに行く。村人が病気になったときは、サラワンではなく、ベトナムの病院に行く。サラワンは遠く、道が悪いからである。ただし、雨季には道が悪くなるので、

ベトナム側にもほとんど行くことはない。

ベトナム戦争のとき、この地域はベトナムによって統治されていた。それは戦後まで続いたが、1979 年に返還された。そうした経緯から、戦時には、ベトナム軍に入隊した若者も多かった。また、ベトナム側も、T 村の成人にベトナム語を教える学校を建設した。こうしたこともあり、T 村の村人の多くが、いまだにベトナムと深いかわりを持っている。

2.3 民族集団の概要

ラオス情報文化省文化研究所サラワン事務所によれば、同県には 12 の少数民族集団がいる^{注8)}。それらのひとつの集団がパコである。同事務所によれば、サムエイ郡でいわゆるロングハウスで居住をする集団は、パコのほかにカナイ (Kanai)、カドゥーなどがある。

パコは自称だが、フランス人またはラオ人によってカドゥーという名称をつけられた^{注9)}。Pako の Pa は森や場所などを意味し、Ko は山側を意味する。したがって、Pako の意味するところは、「山の森に住む人びと」といった意味になる^{注10)}。

2.4 クランについて

1) 氏族姓の意義

パコの居住にかかわる特徴として、氏族姓にもとづくクラン外婚、祖先崇拝^{注11)}、婚姻後の居住には明確な規則はないが、新婦が新郎の世帯で暮らすのが慣習化していることなどがあげられる^{注12)}。また、養取慣行はなく、男性は婿に入らない。男性が婿に入るとは大きなバイオレーションとなり、祖先の怒りを買うという。

結婚した夫婦にもし男子がいなければ、老後、兄弟の子どもの中の男子の世帯と一緒に暮らす。こうしたいわゆるレジデンスにかかわるオーダーは多様であり、

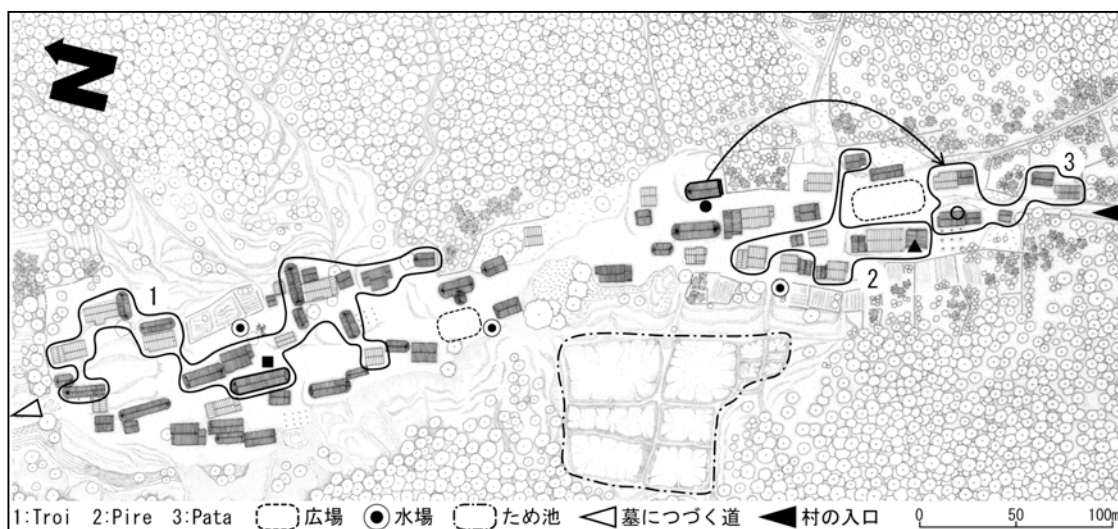


図 2-1: 調査村落図

たとえば、娘しか持たない夫婦で夫が死亡した場合は、①妻が実家に帰る（若いとき）、②夫の兄弟の子どもと暮らす（高齢になったら）、③妻は娘の世帯と一緒に住まないが娘夫婦の家屋の近くに居を構えてそこで暮らすといった居住様態がある。

離婚については、頻繁にあり、とくに問題とされない。女性が出戻るかたちになるが、出戻った女性は、兄弟が暮らすロングハウスで生活する。寝るときには後述するモントゥモイに蒲団を敷いて寝る。食事は兄弟たちが世話をする。また、ロングハウス内の仕事や家事、農耕にかかわる労働も強制されることはない。

パコのもうひとつの特徴として、クランへの帰属意識が強く、クラン名が異なる集団が村内に移住しようとしても拒否する傾向がある。ここから逆に、現在のT村も含めたパコの村落が、いくつかのクラン名の集団により組織されていることがわかる。T村におけるおもなクランには、ピレ（Pire）、トロイ（Trois）、パタ（Pata）、タンゴ（Tango）、ラライ（Lalai）、カワ（Kawa）、アデン（Adeng）、プアイ（Puai）がある。このうち、T村の創成時には、パタとタンゴそれぞれのクランが先に現在地にたどり着いたという。

クラン名の始祖に関しては、つぎのような言い伝えがある。そもそも、始祖のクランは3つあった。それらは、3人の兄弟や義理の親子関係として表現される。兄弟の場合は、長男はアゲング（Angeng）、次男はパカイ（Pakai）、三男はパタとされる。長男には女子しか生まれず、その娘も婚出したために、長男のクランを名乗る者、すなわちアゲングはいなくなったという。次男以下のクランを名乗る者は、パタも含めて現在もタオイ郡にいるという^{注13)}。

義理の親子関係として語られる場合は、アゲングが父親であり、彼にはふたりの娘がいたとされる。ふたりのそれぞれの結婚相手がパタとパカイだった。この場合も、パタとパカイのクランは現在まで残ったが、始祖のアゲングが消滅したことに変わりはない。

2) 婚姻と婚姻交換

婚姻は、姻戚という社会集団を組織する契機となる^{注14)}。氏族姓外婚であることはすでに述べたが、さらに細かいタブーが婚姻交換にはある。それは、伝承の中で語られるクランごとの出自にかかわるものである。おもな婚姻交換のタブーとその理由を以下に示す。

・ピレとトロイ：ピレがトロイから妻をもらうことは可能だが、トロイがピレから妻をもらうことはできない。その理由は、クランの始祖の時代にピレがトロイから先に妻をもらったからである。もし、トロイがピレから妻をもらうと、両クランの

あいだで病気や死が起こる。

- ・ピレとパタ：両者はたがいに婚姻不可である。かつて、両者は兄弟同士だった。現在のピレの始祖が兄で、弟は現在のパタの始祖である。あるとき、兄はひとりでピレという名の鳥を追ってどこかに行ってしまった。その末裔たちがピレと名乗るようになった^{注15)}。もともと兄弟同士なので、婚姻は不可となる。
- ・トロイとタンゴ：トロイからタンゴへ妻を出すのは不可である。理由は、かつてトロイがタンゴから先に妻をもらったからである。
- ・ラライ：どのクランよりも先に妻をもらっていたため、村落内のどのクランからも妻をもらえる。
- ・カワ：ラライと同じ理由でどのクランからも妻をもらえる。
- ・アデン：ベトナム戦争時からT村に移住してきた新しいクランである。これまで、アデンの男性はトロイから妻をもらった。よってトロイは、アデンからは妻をもらえない。
- ・プアイ：ピレから妻をもらったことがある。よって、ピレはプアイから妻をもらえない。

こうした婚姻交換のルールは、異民族とT村の村人との婚姻でも適用される。たとえば、ピレの村人とラオ人やベトナム人が結婚する場合、先にピレがラオ人に妻を出したら、ラオ人の姓集団はピレに妻を出せない。村落の創成時のように村落内に複数のクランがないとき、たとえばふたつのクランしかないときは、別の村落で妻となる女性を探すことになる。T村の場合でいえば、ピレはトロイから妻をもらえるが、その逆は不可能である。よって、トロイの男性は別の村落で、ピレ以外のクランから妻を探すことになる。

この交換の規則は厳密であり、かつてはこれを破ったら村落から追放されたという。現在でも、追放には至らないが、相応の罰金を課されるという。その罰金は、規則を破ったことにより引き起こされる災厄を浄化する儀礼的行為を行う費用となる^{注16)}。

クランについては、特定の動物とのあいだに、いわゆるトーテムのような関係もある。たとえば、トロイは犬、ピレは猫などである。トロイについては、昔、トロイが生まれたとき、母親が死んでしまい、代わりに雌犬がトロイに母乳を与えたという神話がある。トロイは犬を神聖視しており、犬を食べない。パコのあいだでは、家屋の新築のさいには犬を供養するが、ほかのクランの者にはその料理をふるまうがトロイ自身は食べない。妻がほかのクラン出身でも、トロイの世帯に嫁げば食べることはできなくなる。

2.5 宗教と役職者について

T 村の村人は、家屋内部では祖先祭祀を、村落外部では精霊信仰にもとづく諸儀礼を行う。祖霊は家屋内部、具体的には祖先祭祀の儀礼道具を納めた箱の中にあるとされる。家屋の新築後は、最初にこの儀礼道具を運び入れる。代表的な精霊は、森の霊である。

宗教的諸実践にかかわる役職については、霊的存在と交信を行い託宣を得るシャーマンは、かつては存在したが現在は死に絶えたという。いっぽう、ケオ・ヤン (Keo yang) という、祖先祭祀と精霊祭祀を司る役職者が、クランごとにいる。

この役職は、代々、クラン内で継承されてきた。現在のケオ・ヤンが死亡したら、そのクランのつぎの最年長の男性が次代のケオ・ヤンになる^{注17)}。男性でなり手がいない場合、該当者が小さな子どもなどの場合は、現在のケオ・ヤンの妻が引き継ぐこともできる。独身の男性はこの役職につくことはできない。おおむね 30 歳を過ぎた男性すなわち既婚者ならば、この役職を担えるという暗黙の了解がある。ただし、放蕩や飲酒を過度にする人はふさわしくないとされる。ケオ・ヤンの役職にかかわる知識は、とくに学習する必要がない。儀礼のたびに、長老集団が教える。

このケオ・ヤンのほかに、村落の外の精霊に対処する役職者が 3 人いる。3 人の呼び名に違いはなく、すべてアルアイ (Aruai) と呼ばれる^{注18)}。アルアイの 3 人のうちのひとりとクランのケオ・ヤンが、村落の外で共同で祭祀を行う。

3. 村落と家屋の特徴

3.1 村落移住の経緯

T 村の古老の語りによれば、パコの人びとは、もともとベトナムのコンティという海沿いの町にいた^{注19)}。そこは山ではなくて平地だった。そこから離散し、現在のように山地に拡散するようになったとの言い伝えがある。そのころの同地域では、チャンパ王国^{注20)}がパコたち諸民族集団を統治していた。

T 村の創設時期を確定するのは困難だが、少なくとも 60 年ほど前の村落の様子を記憶している古老がいる。その人物によれば、当時の T 村は、現在とは別のところにあったという。当時は、トロイが 80 世帯、200 人ほどおり、トロイ全体で一軒のロングハウスに暮らしていた。また、パタ 60 世帯、100 人前後が同様に一軒のロングハウスで暮らしていたという。

ベトナム戦争は、この地域に生きる人に多様なインパクトを与えた。T 村でも、戦争当時はベトナムに移住し、戦争終了後にベトナムから帰還した人は多い。

また、ベトナムに親戚がいる一部の人びとは、帰還せず、そのままベトナムに居住し続けている。

3.2 土地所有について

T 村に限らずパコの村落では、従来、農地や森林を個人が所有するという意識がなかった。これは現在もみられ、また、村落内においても、土地の所有権や使用权はない。村落内の空き地には、村人であればだれもが家屋を建設できる。家屋を壊し、更地に戻したら、その土地はだれのものでもなくなるという。一般的には、もとの家屋を建て替えるときには、もとの家屋があった土地に再建するが、だれも家屋を建てていない場所に家屋を建設することも、大きな問題にならないという。ただし、事前に村人にその土地を使用することを告知し、協議を受けること、承認されれば、建設予定地の周囲に暮らす村人に建設のアナウンスをすることが求められる^{注21)}。

3.3 家屋の概要

T 村では、1998 年にはじめて、ロングハウスではない、いわゆるラオ様式の家屋が建設された。現在は、ロングハウスのほかに、こうした家屋も数多くみられる。しかし、ロングハウスもいまだに多数残存している。ここでは、そうしたロングハウスの概要を述べる。

1) 空間の呼称と機能

ロングハウスの呼称は、デウン・トイ (deun thoi) である。デウンは家屋、トイは長いことを意味する。デウン・トイは、文字通り「長い家屋」を指し示す^{注22)}。パコによれば、「大きい家屋」に相当する呼称はない。デウン・トイには、少なくとも 4 家族以上が暮らすのが一般的とされる。柱と梁には木材、外壁と床には竹を使う。高床・矩形の平屋建て、草葺きの屋根、平入りで切妻造であることが共通している。平側は各戸の出入り口のある面を正面とする。

ロングハウス内部は、ふたつのエリアに分けられる (図 3-1)。ひとつは壁で区切られた世帯ごとの居室で、もうひとつは接客や儀礼時に使われる公共的な居室である。前者はアボ (abo) と呼ばれ、後者はモントゥモイ (mon tu moi) と呼ばれる。アボには、近年、炉のある居室すなわち炊事室アボと寝室アトゥ (a tu) に分ける壁が設けられることが多い。しかし、もともとは壁のない一室空間であり、全体がアボと呼ばれていた。そもそも、炉の名称がアボであり、この点からは、炉を共有する集団が居住の単位であることが示唆される。

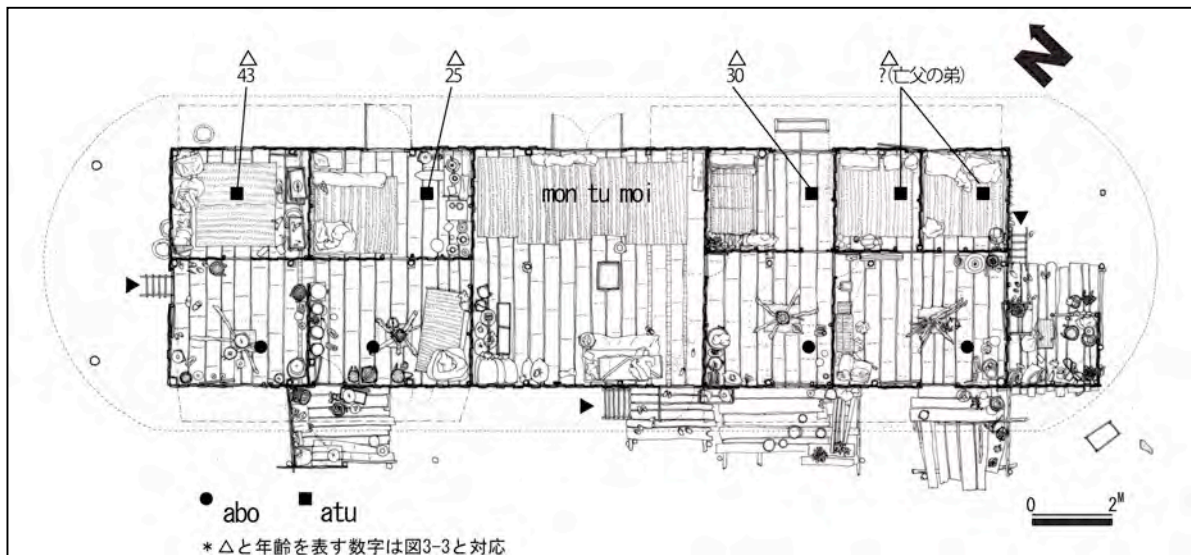


図 3-1: 空間組織 (トロイ・クラン, 図 2-1 ■)

以前は、モントゥモイや各世帯の居室に通じる戸口へは、はしご (kam pong) で上ようになっていた。現在では、丸太を粗く並べた踏み台状の露台が設けられるのが一般的である。サンダルなどの下足を履くようになって、着脱しやすいように工夫された空間である。その露台は、居室の床面よりも少し低い。

ひとつの居室アボに暮らすのは一組の夫婦とその子どもたちからなる世帯である^{註23)}。各世帯は、炊事、食事、就寝、日常の細々とした仕事のほとんどすべてをアボで行う。各居室内の炊事室アボにある炉の真上には、炉棚 (tu ri al) が吊るされている。天井は張っておらず、屋根裏には収納空間 (ta rung) が確保されている。内部空間を広く活用する工夫として、平側の軒下部分で外壁の外まで棚 (yah) を飛び出させる。

現在の T 村でみられなくなったものに、部屋相互をつなぐ出入り口の意匠がある。かつては、竹を編み上げた縦長の楕円形をしており、ロングハウス内の居室すべてにつけられていた^{文1:50)}。

生活物品は簡素であり、アボには竹や木から作り出した調理道具や食器、鉄製の鍋類などがある。モントゥモイには、接客用のゴザや蒲団が置かれるほかに、後述する祖先祭祀の祭壇が、ケオ・ヤンの家屋には設置される。家具や家電製品に類するものもほとんどないが、近年は市場で各種収納棚やテレビ、オーディオ製品を購入する世帯もみられるようになった。

ロングハウス内では、世帯ごとに就寝する。ただし、思春期の女子はアトゥの中に小部屋を分けて、そこで寝る。思春期の男子はモントゥモイに寝る。来客があり、モントゥモイに寝るときは、男子は別の家屋で寝る。若い男子が女子の小部屋に入ることはできないし、同衾することもできない。男子と女子が夜に会うときは、家屋の床下やその他の場所でなければならない^{註24)}。また、男女が結婚すると、最初はモントゥモイ

で寝る。しかし、夫婦はそこでは同衾できず、離れて壁際で寝る。夫婦用の居室が増設されたり、空室に入居できたりしてはじめて、夫婦は同衾できる^{註25)}。

T 村では、現在、2つのロングハウスがトイレを併設している。木の板を穴にかぶせて落とす方式の簡易なものである。多くの世帯でトイレをつくりたいという意思はあるが、資金が足りず困難な状況である。トイレは政府の「貧困削減プロジェクト」の対象ではないことも普及が遅れている原因である。

パコの方位観のうち、ロングハウスにかかわるのは南北の軸である。ロングハウスの長辺側すなわち棟の方向を南 (pandan kan) と北 (pandan chen) の軸に向ける慣習がある^{註26)}。ただし、モントゥモイの開口部は、東と西のどちら側に向けてもよい。

就寝時の頭の向きは、頭が棟に向かない方向すなわち外壁の向きならどちらでもよい。ただし、後述の祖先祭祀を行う祭壇ヒンとその儀礼道具、とくに茶碗に足を向けてはいけない。

ロングハウスは、通常、複数の階段を持つが、それらのうち年長者 (父母、長兄など) がいる側の階段が主階段とされる。

ロングハウス内で、いったん世帯の居室を定めたら、その後は場所を変更しない。その居室に暮らす世帯の世帯主が亡くなっても、男子がその居室を引き継ぐ。同様に、なんらかの理由でロングハウス内に空室ができて、すでに居室を所有している世帯は移ることはできない。空室に入ることができるのは、モントゥモイに暮らす若い男子が結婚したときのみである。また、かつては、空室が足りない場合には、世帯の増加に対応して居室を増設していた。

T 村では、ロングハウスを含む各家屋が密集して立地している。村人によれば、こうした隣棟との狭い間隔は、人がたくさん密集しているほうが分散している

よりもよいとされること、家屋同士の間隔が遠いよりも近いほうが好まれることに関係しているという。

2) 構法の特徴

ロングハウスの構造体は切妻の両妻とも陸梁と合掌梁で完結する(図 3-2)。平面は細長い矩形だが、おおむね柱位置で居室に区画される。区画は簡素な丸竹の方立や上下の壁留めに、割竹の網代壁をしつらえる。区画は小屋梁上部の小屋組にまで至る。ロングハウスを組織するほとんどの部材が自然の丸太材である。

梁間方向の断面は単純で、柱は堀立柱で内側に転んでいる。これにより、屋根荷重による架構上部の外部への開きを押さえている。

床は地盤面からおよそ1m上がっていて、床組が柱下部を拘束する。床下の梁間方向に大引がかかる。床は下地が三重に掛けられる。小丸太の根太を桁行方向の大引上に並べている。それに直行して小丸太や丸竹を敷き並べ、その上に小割板状の木板や割竹を並べる。そして、割って平らにした竹を敷き並べる。

部材の仕口の拘束は締結で、籐や竹などの紐によって縛る。さらに、各部材の接合部は相欠きで組み立てられ、部材相互が拘束された比較的強固な架構である。鉄釘は使われない^{注27)}。

内外の壁や開口部はほとんどが竹を利用している。壁は上下左右に壁留めとして丸竹を配置し、その丸竹の一部に穴を空けて割竹編みの網代壁を止めている。

棟桁がある事例もみられるが、それは合掌梁の合掌部分下にみられ、小屋束がないので合掌梁や上方の棟木から吊り下げている。屋根に葺く草の厚さは軒桁付近で6、7cm程度である。軒先は切り揃えずに葺き放し、棟部分は増し葺きしている。草は、束ねた状態ではなく、長い茎を折り曲げて、その折山に芯を入れて

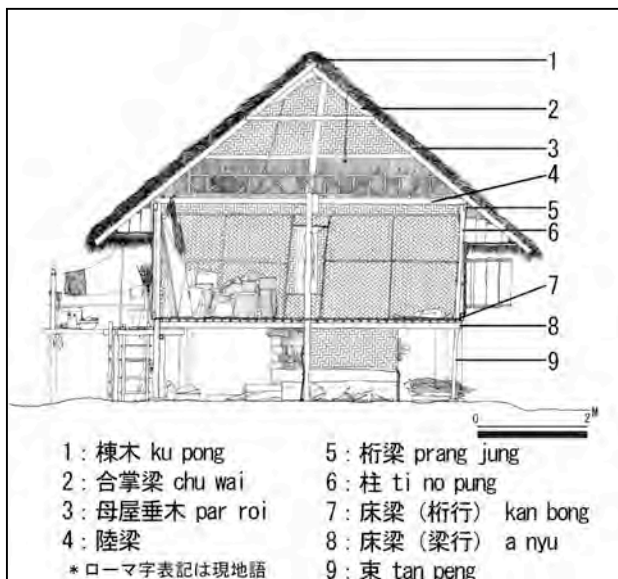


図 3-2: ロングハウスの構造 (図 2-1 ■)

パネル化している。

3) モントゥモイと祭壇について

棟の中心部にあるモントゥモイは、ロングハウス内部に暮らす各世帯に共有されており、日常の団らんの場であり、来客の接待にも使われる。かつては、モントゥモイを区切っている左右の間仕切り壁が屋根の稜線(棟)と交わる位置(2カ所)に、水牛の角をクロスさせた飾りをつけていた^{文1:33-35)注28)}。

クランのケオ・ヤンが住む家屋のモントゥモイには、祖先の霊が宿るとされる祭壇ヒン(hin)がある。この祭壇の形式にはいくつかある。茶碗を母屋垂木から直接吊るすものや、小屋組みとは無関係に吊り棒を横に渡しその棒から吊るすものなどである。茶碗は、上位世代のものほど上かつ手前に吊るされている。左右の区別はないが、夫婦の茶碗は隣り合うようにしてある。世帯成員となる乳児が新たに誕生したり、成員が亡くなったりしたときは、世帯主が茶碗を吊るしたり外したりする。そのさいには、鶏か豚を供犠する。

祭壇脇には袖壁があり、そこにはクランの共有財産である祖先祭祀の儀礼道具を納めた甕がひとつと角笛、線香などが入った空き缶が置かれている。角笛は、水牛を供犠するときだけ外に持ち出す。線香は満月と新月の晩に焚いて、祖先に祈りを捧げるために使う。

4) ロングハウスをめぐる口承

パコの人びとがロングハウスに暮らすようになった経緯は、つぎのような口承によって語られる。かつて、パコは貧しく、山で暮らしていた。人びとは、着るものさえなかった。当時は、パコのほかに、カナイ、カドゥー、タオイ、カタン、タラン、カルム、アラク(Alak)、ンゲ(Ngeh)、カトゥ、グリアン(Griang)などもこの近辺の山地で暮らしており、また、すべての集団が兄弟関係にあった。

その中の長男だったパコは、怠け者で頭もよくなかった。弟たちから食べ物をもらって暮らしていた。しかし、長兄であることから、山の一番高いところにいた。ほかの兄弟たちは、低地に住んでいた。

この当時、山には虎がたくさんいた。山で分散して暮らすのは大きな危険を伴う。それゆえに、パコはひとつの家屋に集まって暮らすようにしたのだという。

家屋の中では、すべての食料を分け合って食べていた。現在のパコには、来客にかならず酒食をふるまう習慣があるが、それもこの当時からのご慣習であるという。ふるまう量に決まりはなく、少量でもよいからかならず客に食べさせるという。

ロングハウスの内部では共働の意識が強く、病気の

ときや来客があったとき、ロングハウスに暮らす全員で対応していた。かつてのロングハウスでの暮らしを語る村人たちの言説からは、たとえば「助け合う」「手伝いをし合う」「猪を獲って分け合う」などのエピソードが頻繁に語られる。

T村の人びとがいつからロングハウスに居住するようになったのかについては、以下のような口承がある。山に暮らしていたとき、パコの人びとは家屋を持たなかった。家屋を建設するための道具すなわち鉄器を所有できなかったためである。この近郊の山地には洞窟がたくさんあり、家屋を持たない人びとはそうした洞窟に暮らしていた。あるとき、パコの一部の人びとが、ラオ人とベトナム人から鉄器を手に入れた。また、セコーン県の山地に暮らすカトゥウからも鉄器をもらったとされている。これにより、パコは木材の加工をするようになった。そして、最初にロングハウスを建てたのは、パタの人びとだとされている。彼らが最初に鉄器を入手したからである。はじめは、モントゥモイが複数ある一軒の家屋が建設され、そこに全員が暮らしていた。100人程度の人が住んでいたとされる。

5) ロングハウスをめぐる習俗

ロングハウスは、クランごとの卓越した共同性を表象する建築物である。だから、異なるクラン成員同士がひとつのロングハウスに暮らすことはできない。この点は、クランごとに儀礼のしかたが異なるので、共住はできないとも表現される。

T村での調査では、食事のオーダーはとくになく、男女一緒に食べるとされる。しかし、村によっては男性が食べた後に女性が食べる習慣もあるという。

モントゥモイや両親の居室の炉にくべる薪は、窓から搬入することはタブーになっている。かならず戸口から運び込まなければならない。

ロングハウスにかかわる習俗で重要なことのひとつは、動物カテゴリーとの関連である。ここでは、ロングハウスに入ることができるかどうかに着目して、そうした関係を記述しよう。はじめに、もっとも一般的な家畜に犬がいる。犬は、ロングハウス内はもちろんのこと、寝室にも入ることができる。猫も同様である。しかし、通常、どの世帯でも飼養されている鶏、豚などは、ロングハウス内に入ることはできない。

村落周辺の森林に生息しているある種の野生動物、たとえばノック・カチップという野鳥は、家屋の軒裏に巣をかけてもよい。それは吉兆とされ、たとえば世帯の成員がひとり増えると解釈される。これと対極をなすのが野鶏や蛇、鹿など、森林に生きる動物である。たとえば、野鶏は、家屋の中に入ると世帯成員のだれ

かが病気になったり、屋根にとまられた家屋が火事になったりするとされる。世帯を見舞う不幸や災厄を表象するのである。

これらの動物は、家屋ばかりでなく、そもそも村落内に侵入することを忌避される。両者は、姿が見えてもよくない兆しと解釈され、食することも避けられる。これらの動物が見つかったら、アルアイが村の内外で浄化儀礼を行ったり、村人に注意を喚起したりするいっぽうで、当の動物は銃や矢ですぐに屠畜される。

このほかに、生理中の女性がほかの家屋に入ってはならない^{注29)}、家屋内で宴会や祭りのさいに大きな音を出すときはクランのケオ・ヤンに最初に相談するなどの決まりがある。ケオ・ヤンは、そうした申し出があれば、儀礼を行い祖先からの許可をもらうという。

3.4 住まい方の変容

これまでは、ロングハウスの一般的な住まい方を記述してきたが、ここでは、そうした様式が崩れた事例をT村で実測調査した5戸のロングハウスの中から取り上げる。ひとつは、もとは1戸のロングハウスに住んでいたトロイの世帯集団が、ロングハウスを新築し、内部に暮らす世帯集団を再編して居住し続けている事例である。もうひとつは、家屋の新築のさいに世帯が分散していったピレの事例である。両者とも、そこに暮らす人びとへの聞き取りをもとに、ロングハウスをめぐる住まい方の変容について記述する。

1) 世帯の再編 (トロイ・クラン, 図2-1■)

- ・ 概要 (図3-1, 3-3) : このロングハウスには4世帯が暮らす。北側の端から順に、43歳の次男世帯、25歳の四男世帯、モントゥモイをはさんで30歳の三男世帯と続き、一番南側の大きな居室には、物故した父の弟(年齢不詳)が暮らす。父親は、生前は三男世帯と同居していた。
- ・ 建設時期: 2006年。
- ・ 建設費: 2500万Kをロングハウスに暮らす4世帯で等分した。建設費には以下のものを含む。豚(30万K×23頭), 牛(300万K×2頭), 山羊(50万K×4頭), 犬(25万K×4頭), 鶏(5

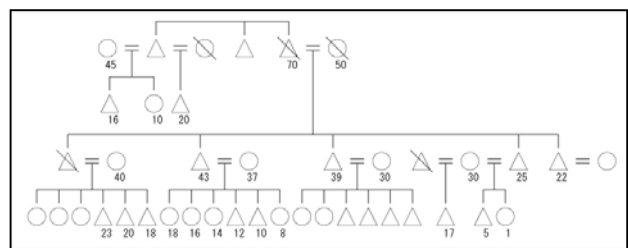


図3-3: 世帯組織図

(△男性, ○女性, =婚姻, 数字は年齢, 斜線は故人)

万 K×40羽)，アヒル（10万 K×8羽），米（6万 K／袋×20袋），化学調味料，茶，魚，酒，タバコ。

- 工期：2ヶ月。
- 生業：農業。畑と水田をあわせて1ha所有。作物は、水稻（種粃30kg／年），キャッサバ，インゲン，カボチャなど。家畜は飼養していない。ロングハウス内では，畑と水田は別々に耕作している。家畜は飼養していないが，鶏，アヒル，山羊などがいれば，世帯ごとに別々に飼養する。いっぽう，水牛と牛はロングハウス全体で共有し飼養する。
- 所有権：各部屋は各世帯が所有する。ロングハウス自体は4世帯で共有している。
- 建設の順序：食物を用意してから，建設作業を手伝ってくれる村人を募り，その後，柱となる部材を切り出しに森に行く。ふるまうための食物が尽きたら工事を止める。しばらくのあいだ，金銭や家畜を蓄え，再度，食物をふるまう用意をする。その後に，屋根に草を葺く作業を行う。以下，このように，建設を手伝う人びとへのふるまいのための食物をそろえてから，工事をすすめていく。
- 立地場所の移動：このロングハウスに住む人びとは，以前は現在地の近くに建てられていた別のロングハウスに住んでいた。4年前に台風被害にあい，それを契機にして現在地に建て替えた。以前の場所では，ロングハウスの居住者が病気になったり，台風で倒壊したりということが頻繁にあり，不吉なので現在の場所に移ったという。
- 移動後の変化：場所を移した後に，ロングハウスに暮らす世帯数が変わった。以前は9世帯が暮らしていたが，現在は4世帯である。その理由は，かつて共同で暮らしていた世帯の一部が，経済的に豊かになったからだという。そうした世帯はロングハウスから離脱して，2階建てのRC造の家屋を建てた。すでに物故した父親とその息子たちの世帯は，経済的に困窮していたので，そのまま残り，独立した家屋に住んでいた四男を吸収して，共同で1戸の家屋を建てて住むことにした。
- 経済的格差：農耕や家畜飼養を個別の世帯ごとに行うようになり，ロングハウス内で経済的格差が生まれるようになった。それが，上記の一部世帯のロングハウスからの離脱につながっていった。

2) 世帯の分離事例（ピレ・クラン，図2-1▲）

- 概要（図3-4，3-5）：父母の世帯とその5人の息子たちの世帯が共住する。父親は物故したが，母親もひとつの世帯となっている。三男だけは，別

に独立した家屋に暮らしている。世帯ごとの居室内に炉はなく，別棟で炊事と食事を行っている。よって，世帯ごとの居室をアボではなくアトゥと呼び，別棟をアボと呼んでいる。

- 建設時期：2008年2月。
- 工期：およそ7ヶ月。3月に建設を開始し，10月に竣工した。
- 生業：おもに農業を行い，農閑期には製材や大工仕事を請け負う。その場合，他村に呼ばれて行くこともある。大工仕事を請け負うときは，一軒請負で500万K程度になる。床，柱だけの部分請負で200万Kである。サムエイ郡の町と近郊の村で，ラオ人やパコから仕事を請負，これまでに25戸ほどを建設した。飼養する家畜には，アヒル，山羊，牛，水牛，豚がいる。年収は，ロングハウスに暮らす5世帯で100万K程度。ただし，5世帯の収入は世帯ごとに稼ぎ，別々に消費する。オートバイや家電製品などの大きな消費があるときには，5世帯が協力して出費する。
- 建設費：この家屋の建設当時，資金が足りず，従来のようなロングハウスを建設できなかった。当時，三男夫婦は近隣の小屋に住んでいたが，その後，資金が集まったので三男夫婦のための独立した家屋を建設してやった。建設費用は3500万K。5人兄弟で等分し，1世帯当たりおよそ700万Kを負担した。
- 自作の土台：この家屋では，柱は堀立ではなく，型枠に流し込んで自作したRCの土台の上に乗っている。T村では，近年建設される家屋の多くでこのような土台が使われている。セメントはベトナムで購入する。
- 柱と板：大鋸で自力製材した。一日一本のペースで製材し，ベトナム製の鉋で表面を仕上げた。

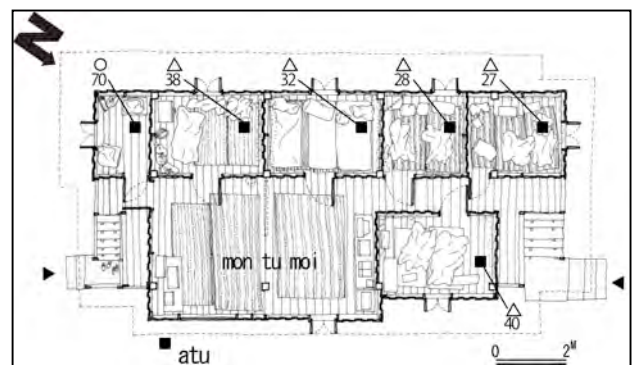


図3-4：空間組織

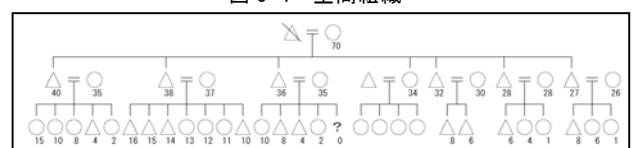


図3-5：世帯組織図

- ・ 木材：T 村の周囲の山から切り出した。周囲の森林は森林伐採が禁止されているが、建設部材として使うことは許される。
- ・ 壊したもとの家屋の部材：もとのロングハウスで各居室を構成していた壁、柱、屋根などは、新しい家屋で新しい居室に使った。また、炊事・食事棟の建設にも使った。
- ・ 資産の継承：長男が優遇される。儀礼道具は長男に継承されるが、長男が死亡しているなら次男に継承される。土地や田畑は、次男や三男がほかの場所を自力で開墾し、独自の生計を営むなら長男に与えられる。長男と同じ場所で耕作するなら兄弟で等分する。5人兄弟で水牛が6頭残された場合、長男が2頭、次男以下が1頭ずつ分与される。こうした分与のしかたは土地でも同様にみられる。
- ・ 郡からの指導：もともとあったロングハウスには、13世帯が住んでいた。現在は母親もひとつの世帯と考えて6世帯なので、7世帯減ったことになる。ロングハウスから分離した理由は、個人的なもののほかに、郡からの指導があったことが大きく関与している。近年、郡からは郡長による書類が配布され、そこには、ロングハウスを解体して個別の世帯で暮らすように書かれていた。郡役所によるその理由はつぎのとおりである。①火事の延焼防止。一度の発火で家屋が全焼するケースが多い。②世帯ごとの経済状態を把握するために、個別世帯ごとに生活するのが望ましい。③保健行政上の指導。「清潔な世帯」というイメージを強調したい。④近代化。村落の発展と開発のために、個別の世帯で生活してほしい。郡側、ひいては国家の姿勢を踏まえて、家屋を新築するとき、ロングハウスに住んでいた13世帯の成員全体で方策を議論した。その結果、この家屋には亡くなった父親とその子どもたちの世帯が住むことになった。

4. 分散後も残る共同性

最近まで、ロングハウスでは複数の世帯が共同生活をしてきた。しかし、前章でみたとおり、現在では、世帯が分離し、ロングハウスも解体していく傾向にある。それにもかかわらず、ケオ・ヤンによる祖先祭祀は現在も共同で行われる。この儀礼に使われる道具に着目すると、共同性を保証するロングハウスという形式は変容したが、共同性自体は残存していることがわかる。ここでは、パタのひとつのロングハウスで所有されていた儀礼道具に着目しながら、その様態を明らかにする。取り上げるのは、長男、次男、三男が母親と同居する家屋である（図4-1、4-2）。

4.1 家屋の特徴（パタ・クラン、図2-10）

- ・ 概要：母親を筆頭に、4世帯が暮らす。この家屋も、ピレの事例と同様に、個別の居室内にすでに炉はない。代わりに、同じ棟の中に炉をふたつ設けて世帯間で使い分けしている。母親は炊事をしない。食事は、息子世帯のいずれかが世話をする。
- ・ 家屋を分割した理由：当時はひとつのロングハウス（図2-1●）に6世帯が住んでいた。子どもたちが小さかったので、家屋内部はそれほど手狭ではなかった。その後、子どもたちが成長して結婚するようになり、ロングハウスに暮らすのは10世帯にまで増えた。それで、居住する世帯全体で相談して、父や祖父の単位で家屋を分けることにした。世帯の増員にあわせてロングハウスの増設も可能だったが、それはしなかった。
- ・ 建設年：2004年。
- ・ 工期：1ヶ月。
- ・ 生業：農業。畑で陸稲、トウモロコシ、カボチャ、ナス、イモ、マンゴーなどを栽培する。飼養する家畜は豚4頭、鶏30羽、山羊5頭、アヒル10羽

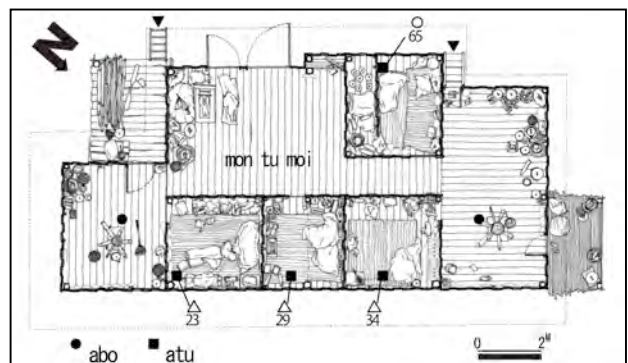


図4-1：空間組織

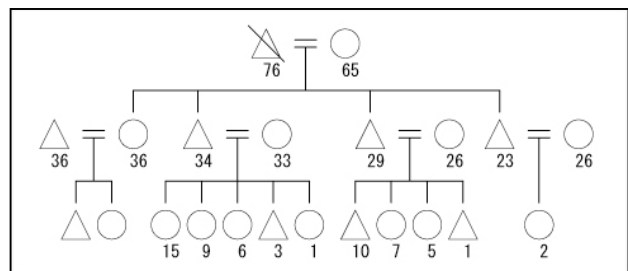


図4-2：世帯組織図

がいる。収入は、全体でおよそ200万Kである。

4.2 儀礼道具の分散

ケオ・ヤンが行う儀礼のさいには、特定の儀礼道具が使われる。これは、前述のヒンとセットになったもので、パコにとってはもっとも重要なものである。その儀礼道具の内訳は、クランによって若干の違いがあるが、おおむね以下のものである。

- ① 女性の巻きスカートになる布 (a kop)
- ② 鐘 (tanh le)
- ③ ふんどし様の男の着物 (tang oh)
- ④ 儀礼用の巾 1メートルほどの布 (an nai)
- ⑤ ケオ・ヤンの貫頭衣 (ao vanh tho)
- ⑥ 竹製の占い道具 (a shio)
- ⑦ 個人の魂が入る茶碗 (ti ngan kiri) ^{注30)}
- ⑧ 女性用の石のネックレス (a teng)
- ⑨ 儀礼用のタタミ (an ciao yang)
- ⑩ 女性の銀の腕輪 (khong)
- ⑪ ケオ・ヤンが使用する頭に巻く布 (keurn)
- ⑫ 水牛の皮をはったタイコ (akun)

上述したように、かつて図 2-1 の●のロングハウスに暮らしていた 10 世帯は、現在、それも含めて 6 戸に分散して暮らしている。図 2-1 の○に暮らす兄弟たちの物故した父親の系譜に連なる成員が暮らす 2 戸と、その父の兄弟とその妻の系譜に連なる 4 戸である。

このように、ロングハウスから分離したパタの一团だが、儀礼は今でもパタのケオ・ヤンのもとで共同で行っている。かつてのロングハウスでは、○に暮らす兄弟たちの父親がケオ・ヤンであり、儀礼道具を保持していた。ロングハウスからの分離後は、この父親の弟の長男がケオ・ヤンとなり、すべての道具を所有するようになっていく。祖先祭祀があるときには、パタの全成員がこの男性が住む家屋に集まり、全員で祭祀を行うのである。

このような事例は、すでに取り上げたトロイやピレの事例でも共通してみられる。それぞれのクランの中で、儀礼道具を所有するケオ・ヤンがひとりおり、彼が暮らすロングハウスで祖先祭祀が行われるのである。

5. おわりに

5.1 ロングハウスの変容

パコのロングハウスは、従来、父系のクラン成員の世帯が共住する形式をとっていた。T 村では、100 世帯以上が暮らすそのようなロングハウスの存在を記憶している古老も、少なからず存在した。いっぽう、現在のサムエイ郡では、そうした慣習的な世界を完全に維持している村落は T 村も含めて存在しない。ロングハウスから分離して単独世帯になったり、あるいは複数世帯が共住したりするにしても、従来に比べれば規模の小さな家屋が大勢を占める。とくに、2009 年にベトナムとの国境山地を直撃した通称ケットサナー台風の被害は甚大で、T 村でも、この台風により、多くの残存するロングハウスが被害を受けた。これを契機として、早いペースでロングハウスから縮小された

家屋形式へと変化しつつあるのが現状である。

5.2 集団化への指向

しかし、そのように変容した家屋であっても、内部に暮らす人びとの集団の様態は依然として世帯単位である。さらに、世帯の核となるのは一組の夫婦であり、換言すれば婚姻が築く夫婦関係と血縁関係が居住空間の最小単位を組織し、その連帯が生み出す共同性が居住において鍵になることに変わりはない。

単位集団をつなぐこうした共同性は、ケオ・ヤンによる祖先祭祀のさいに顕在化する。世界宗教が波及していない当該地域では、祖先祭祀と精霊信仰が卓越しており、とくに祖先の存在はいまだに人びとに大きな影響力を保っている。集団化を表象するロングハウスの形式自体は多様な要因で変容を余儀なくされるにしても、集団化のエッセンスとなる諸関係が維持・再生産される限り、共同性はそれほど脆弱にならない。この点は、地縁や血縁にもとづかない集住が一般化している現代において、集住の契機と意義の再考を促すものといえるだろう。

ところで、パコにおいてかつてみられた労働や接客、儀礼における共同性、獲物や収穫物の分配にみられる平等主義的共有性は大きな転機を迎えている。現地調査では、かつての資産や資源の共有、分配を必ずしも正当化する言説ばかりがあったわけではなかった。むしろ、そうしたものから解放されたことのメリットを強調する言説も多く聞かれた。このことは、パコにおいて価値観の変容が起きつつあることを示している。ただし、共同や共有、またそれを具現化する共住という形式に代替できるような価値観がいまだに熟成されているわけではない。人びとがどのような新しい価値をみつけ、価値観を抱くようになるのか、それに伴い居住の様態がさらにどのように変容していくのかを究明することを、今後の課題としたい。

<参考文献>

- 1) ラオス情報文化省文化研究所・芝浦工業大学畑研究室『カドラーの住まいと集落—南ラオス・サラワンのロングハウス—』畑研究室、2005。
- 2) ラオス文化研究所編『ラオス概説』めこん、2003。
- 3) Chazee, L. 'The People of Laos: Rural and Ethnic Diversities,' White Lotus Press, 2002。
- 4) Department of Ethnics. 'The Ethnic Groups in Lao P.D.R.,' Lao National Front for Construction, 2005。
- 5) 西本太・清水郁郎「周辺社会における居住空間の歴史変動」クリスチャン・ダニエルス編・秋道智彌監修『論集 モンスーンアジアの生態史 第二巻 地域の生態史』弘文堂、2008、pp.203-228。
- 6) 石井米雄・高谷好一他監修『新訂増補 東南アジアを知る事典』平凡社、2001。

<研究協力者>

平田 智隆	芝浦工業大学大学院地球環境工学専攻。
浜野 瑠美	芝浦工業大学大学院建設工学専攻。
古舘 美聡	芝浦工業大学大学院建設工学専攻。
吉崎 祐里	芝浦工業大学大学院建設工学専攻。

<注>

注¹) サラワンにおける同省の現地担当者との会話。

注²) 現地調査は、2010年2月26日から3月14日まで行った。現地調査では、T村において5戸のロングハウスの平面図、断面図、物品の実測とそこに暮らす各世帯への聞き取り調査、村落図の実測、T村近郊のP村落において1戸のロングハウスの実測を行った。現地調査に先立って、研究打ち合わせを2009年12月17日から20日まで、首都ヴィエンチャン(Vientiane)で行った。

注³) 文献1によれば、2005年当時は人口470(男170人、女300人)だった。役所に登録されていた世帯数は73だが、そのほかに未登録の世帯が20あった。それらは、親と一緒に住み、ロングハウスの内部に自分たちの部屋を持っていた。家屋戸数は37だった。

注⁴) GPSデータによれば、同村は、北緯16度18分48.7秒、東経106度54分53.2秒に位置する。

注⁵) ungumは集会を、waanは広場を意味する。勳功祭宴のような全村的儀礼のときには、平屋の仮設小屋(pano)を建てる。その小屋は、儀礼後に壊される。

注⁶) 家屋一般を意味するデウンとは呼ばれない。

注⁷) 党員の任期は3年で再任可能。毎月10万キープ(以下Kと表記)の報酬が政府から支給される。おこな仕事は、政府の政策にもとづいて役職者を指導管理することである。キープはラオスの通貨で、2010年時点における換金レートにもとづけば、1キープはおおよそ89円になる。

注⁸) この地域の山地には、元来、おおくの山地民が居住していたことは、パコ自身もよく認識している。パコは、そうした人びとの多様さを、象を解体しても行き渡らないくらいたくさん集団がいたと表現する。パコによれば、かつて、カナイ、タオイ(Taoey)、カタン(Katang)、タラン(Talang)らとはたがいに近隣に住んでいたという。

注⁹) T村の人びとの説明によれば、パコ語の会話では、語尾に「do」という音節がつくことが多い。これは、「えーっと」や「うーんと」といった意味の語だが、それをもとにカドゥーという他称になったという。

注¹⁰) このように、パコとカドゥーはじつは同じ民族集団である。しかし、ラオスでは、現在でも、オフィシャルには違う集団として分類されている。

注¹¹) ただし、この地域に普遍的にみられる父系の系譜があるかどうかは不明である。

注¹²) その反対に、新郎が新婦の世帯で生活することはない。結婚形態に関しては、妻帯数に制限はない。その場合、一番目の妻は夫と同居し、二番目(以降)の妻は、ロングハウス内の夫妻とは別の居室で生活する。

注¹³) この3兄弟の父母については不明。3兄弟が埋葬されている場所は、現在でもサムエイ郡の近くにあるとされている。パカイの墓は現在、道路になってしまったが、彼が植えたと思われるマンゴーの木が、サムエイ郡近郊のパコの村に現存するという。

注¹⁴) 婚資(wang)は、新郎側から新婦側へは水牛、牛、豚、山羊、現金、銀、つぼ、銅、ネックレス(石)、テレビ、バイクなどがある。いっぽう、新婦側から新郎側へは、米、鶏、布、織物などがある。こうした婚資を逆に贈与することはできない。

注¹⁵) ピレの出現の経緯は以下のようにも伝えられる。この地域にピレという名の川があり、パタの一部が全体から

分かれてその川の近くに住みはじめた。当時は、フランス軍が駐留をはじめたところで、パタの大部分はフランス軍が来るのを恐れてその川には近づかなかった。川の近くに残った一団が、後にピレを名乗るようになった。

注¹⁶) 当事者が現金を持っていなかったら、村人が金銭を供出し、浄化儀礼を行う必要がある。

注¹⁷) たとえば、75歳になるピレ・クランのケオ・ヤンは、1975年からその役職を担っている。次代のケオ・ヤンは、現在70歳の男性である。その人物が亡くなったら、さらにそのつぎは、現在65歳の男性に役職が継承されることになっている。このように、ケオ・ヤンの役職の継承は、親族や兄弟内で閉じることはなく、クラン内の年齢順に決まる。

注¹⁸) アルアイの中の最年長者がもっとも力を持っているとされる。アルアイは、村長などの行政的役職がなかった時代から慣習法にも責務を持つ。

注¹⁹) 文献1、23頁には、以下のような移住の経緯にかかわる記述もみられる。T村の人びとは、もともとベトナムのクワンティー県にあるタンクンという村落に住んでいた。その後、村落を移転してピンレーという村落を興す。このピンレーから分村した一部がチュンダリー村を興したが、よくないできごとが重なったので、チュンカンモイという村落に移転した。そこには虎が多く、虎に襲われる不幸が続いたので30年前に現在(2004年当時)のT村に移住した。T村ができてから合流し一緒に住みはじめた人も多い。

注²⁰) 文献6、184-185頁によれば、インドシナ半島に17世紀まで存続したチャム族の王国。古老によれば、ウォートンというベトナムの王がチャンパ王と戦争をはじめた。そのときはチャンパが負けて、保護者を失ったパコたちは山地に逃げ延びた。その後、チャンパ王はもう一度戦ってウォートンに勝った。両者の戦争はその後も続き、最終的にウォートンが勝利をおさめた。パコたちはそのまま山から戻れずに山に残ったという。

注²¹) 現在、政府により土地の区画整理が行われている。

注²²) 反対に、デウン・ゲト(deun get)は「短い家屋」を意味する。

注²³) 世帯の概念について、本論ではパコのつぎのような考えかたを踏まえる。すなわち、パコでは、炉を共有し、そこで食事をともにする集団のことをアポと呼ぶ。すでに述べたように、これは炉を意味することばでもあり、居室全体のことをも指す。本論では、炉を共有する集団すなわち世帯と定義する。

注²⁴) 慣習法で定められた事項であり、家屋の内部に限らず、男女は結婚する前に同食することができない。

注²⁵) 人にはみえなくても祖霊がみており、それを家人に告げるといふ。このタブーは来客にも適用される。夫婦の来客がモントゥモイで宿泊するとき、同食できない。これに反すると祖先の怒りを買ひ、災厄が訪れるという。その場合は、ケオ・ヤンによる浄化儀礼が行われる。

注²⁶) 水牛の供犠を伴う勳功祭宴においても、パコに特有の方位観がみられる。供犠された水牛の頭が東に倒れたら村落にとっての吉兆であり、西に倒れたら凶兆とされる。

注²⁷) 近辺では針葉樹が少ないいっぽうでフタバガキ科の樹種が多い。この樹種はタンニンを多く含み、鉄材が材中で酸化することも鉄釘を利用しない理由と考えられる。

注²⁸) 屋根の稜線の両端にも、水牛の角をモチーフにした飾りがついていた。

注²⁹) 「家屋が汚れる」と表現される。

注³⁰) 茶碗は、現在は市場で購入するが、かつては自作していた。所有者が亡くなったら山の中に捨てる。空き缶などを代用することはできない。